

持続可能な社会の実現に繋がる地芝居を活用した観光事業の開発 —新事業創出の基盤となる地域の「文化的ネットワーク」形成—



樗木 宏成 OTEKI, Hironari

中部大学大学院国際人間学研究科言語文化専攻博士後期課程 1 年

中部大学人文学部日本語日本文化学科を卒業後、三重大学大学院（修士課程）に進学し、在籍中は伊賀市の芭蕉翁記念館で嘱託学芸員を務めた。三重大学大学院を修了後、中部大学国際人間学研究科の博士後期課程に入学し、美濃の地方文化（俳句や地芝居）を研究中。現在は上記研究の一環として、国立研究開発法人 科学技術振興機構（JST）の「次世代研究者挑戦的研究プログラム」を通して地域文化を地方の観光事業等と結びつける方法について研究・活動している。

ABSTRACT

The purpose of this research is to build a next-generation "cultural network" and create new businesses that will lead to a sustainable society, referring to the relationship between industry and culture in the Edo period. The "new business" here is assumed to be a tourism business that utilizes local culture such as Tono's "Ji-shibai". The next-generation "cultural network" envisions a diverse range of participating members called stakeholders, among whom we plan to include student groups from Chubu University. In 2022, a student group was launched with the theme of "Ji-shibai" as a way of nurturing students who will become stakeholders. Promoting the use of "Ji-shibai" for tourism through this group activity will lead to the preservation and succession of local culture. In 2023, we will expand the themes of student group activities and work on the development of "sustainable tourism" that will lead to the revitalization of local economies and cultural activities by promoting intra-university collaboration.

現代は経済・自然環境・文化継承など、あらゆる観点から「持続可能な社会の実現」が問われているが、日本の歴史を 200 年ほど遡ってみると、これらの課題を抱えていなかったであろうことが見えてくる。循環型社会として確立していた江戸時代は、リユース・リサイクルは勿論、産業廃棄物である灰ですら、農作物の肥料や酒造の麹菌増殖に利用する徹底ぶりであった。「持続可能な社会の実現」に繋がるヒントは江戸時代にあると言えよう。

本研究は、江戸時代の文化と産業の関係を参考に地域の連携体制を構築し、これを基盤に持続可能な社会に繋がる新事業を創出することが目的である。具体的な「新事業」の一例として、東濃の地芝居を活用した観光事業を検討している。

江戸時代は、俳諧（俳句）の文化サロンが産業界のネットワークも兼ねていたことから、文化と産業が密接に結びついていたことが推測できる。農村芸能として発展した地芝居もその一つである。地芝居は主に農閑期に興行されるが、これは過酷な農作業を持続可能なものとする「娯楽」として庶民に受容されていたためである。また、10 代目木曾代官・山村甚兵衛良喬は、「中津川滞留日記」で旧暦 1 月に地芝居を催したことを記しており、中津川宿では地芝居を集客に活用していた可能性も考えられる。上述の文化と産業の関係を参考としたとき、現代においても文化と産業の振興が密接に関与する連携体制の構築が「持続可能な社会の実現」において重要と考えた。

その連携体制として考案するものが、次世代の「文化的ネットワーク」である。このネットワークには「ステークホルダー（利害関係者）」と呼ばれるメンバーの参画を目指しており、企業や個人事業主・地方自治体・教育機関・観光協会・地歌舞伎保存会など、多様な立場の人々の参画を想定している。「文化的ネットワーク」による異業種の人々の交流が地芝居の観光事業化に繋がるよう連携を工夫する。その一手法として、中部大学の学生団体の参画を計画している。

2022 年度、学内の日本語日本文化学科で「地芝居」をテーマとする学生グループを立ち上げた。この活動はステークホルダーとなる学生人材の育成を目的としたものだが、同時に地芝居文化の保存継承や魅力の発信に寄与する活動となるよう取り組んだ。その主な内容として、(1)聞き取り調査、(2)魅力の発信、(3)地芝居興行の現地鑑賞の3点に集約できる。

聞き取り調査では、岐阜県白川町にある東座を訪問した。現地の保存会関係者から東座の歴史をうかがう中で、地芝居が地域共同体を維持するコミュニケーション・ツールであることを学生たちは学んだ。たとえば、東座には役者が化粧や汗を流す浴室があり、地域の銭湯代わりとして芝居小屋の施設が利用されていたことを取材の中でうかがった。また、現在も東座は地域のイベント会場として利用されており、その折の顔出しパネルが保存されている。この調査から、地芝居の観光事業化において「地域住民の地芝居に対する想いを尊重する」ことが重要であると考えた。

また、地芝居に関しては、アニメーション制作ソフト（VYOND）を活用してまとめた。演目を調査したグループでは『仮名手本忠臣蔵』を題材に作品の特徴を調査し、これを動画で紹介した。現在、この動画は YouTube で配信しているため、今後は学生活動を通して VYOND コンテンツを充実させることで、地芝居の魅力発信の一端を担うことができると考える。

地芝居について学んだ学生たちはその後、岐阜県瑞浪市の相生座で実際の興行を見学した。学生からは「文化祭のような雰囲気」や「おひねり（投げ銭）が面白い」と好評で、地芝居が体験型のカルチャーツアーに発展する可能性を得た。また、これを機に地芝居の観光事業化を検討する学生活動が本格的に始まった。

次年度は、地芝居文化を育んだ「地域の自然環境」や「食文化」などもテーマとして幅広く捉えることで上記活動の拡充を検討し、異分野の学生も巻き込んだ団体活動として発展させる予定である。学内組織や学外との連携を推進することによって、次世代の「文化的ネットワーク」の形成に繋げ、地芝居を活用した地域の観光事業の創出を目指す。